ローマ人への手紙前半のビデオでは
パウロとはどんな人物かなぜこの手紙を書いたのか
そして１章から４章にある基本的な内容を学びました
すべての人間は罪の泥沼にはまり救いを必要としているが
その救いはトーラーに従うことではもたらされません
義なる神はイエスの死とよみがえりを通して世界を救い
信仰に基づくあらゆる民族の人々からなるアブラハムの家族を
ご自身の民としました
この手紙の残りの３つのセクションの中で
パウロがこれらについてさらに詳しく述べます
まずパウロが語った信仰による義認についてです
人はイエスの死とよみがえりが自分のためであると信じる時
神と正しい関係にある新しい状態にされます
またアブラハムの契約の民の一人とされ新しい家族が与えられます
そして新しくされた命への希望という未来が与えられるのです
義と認められることが人のすべてを新しく造り変える
とパウロは説明していきます
というのも神の家族の一員になるとは
神がイエスと聖霊を通して造る新しい人間となることだからです
これを説明するためパウロは聖書の最初の登場人物であり
人間という意味の名前を持つアダムのストーリーを
引き合いに出します
彼はあとに続くすべての人間と同じく
罪と自己中心を選び取りました
そのためすべての人は死をもたらす罪の奴隷となり
神の裁きに直面することになりました
パウロは対比としてイエスを新しいアダムと呼び
彼の犠牲的な愛を通して彼が神に誠実に従う人であった
ことを示されたと言いました
イエスは人が神の前に義とされるために自分の命を奉げたのです
それでイエスは
この犠牲によって造り変えられた人間のかしらとなりました
ここから６章につながっていきます
パウロはイエスに従う決断をしたローマのクリスチャンたちは
もはや古いアダムのような人間ではなくなり
新しいイエスのような人間にされると言います

この転換の神聖な象徴が洗礼なのです
彼らの古い人間性はイエスと共に死に
新しい人間性がイエスと共によみがえりました
人がイエスに信頼するならその命はイエスの命に結び付くのです
イエスと共に死にイエスと共に復活します
イエスのような人間としての自分のアイデンティティーを受け入れる時
人は心から神と隣人とを愛する人間になれるのです
このように新しい人間を造ることが神の目的なら
なぜイスラエルに律法すなわちトーラーを与えたのか
という問いをパウロは7章で持ち出します
さてパウロが律法という言葉を使う時
モーセ五書のストーリーとメッセージを指している場合がありますが
トーラーの中に記されていてモーセを通して与えられた
何百もの戒めを指している場合もあります
ここでパウロが言っているのは後者の意味です
これらの戒めの目的とは何でしょうか
パウロはトーラーにある戒めは善いものであり
イスラエルがどう生きるべきかについての
神の意思を示すものだと言いました
しかしトーラーのストーリーを読めば
イスラエルがこれらのすべてを破ったことがわかります
律法が与えられれば与えられるほど
イスラエルはアダムと同じ罪と反逆を繰り返したのです
神が具体的な戒めを与えたときも
罪に満ちた人間の心の問題は解決しませんでした
そのため皮肉なことに律法はイスラエルの罪を
ますます大きなものにしたのです
しかしこの矛盾こそが大事なポイントだとパウロは言います
神はこのことを通して人間の心は悪に支配されているため
トーラーは善いものだけれどその解決にはならないということ
を明確にしておきたかったのです
パウロは8章でその解決は
イエスと聖霊によってもたらされたと言っています
トーラーの戒めは拡大鏡のような役割を果たしました
これにより全人類の問題がイスラエルの民に集約されたからです
そしてイスラエルを代表するメシアであるイエスは

その死とよみがえりを通して
すべての罪の代価を払い解決してくださいました
イエスはさらに彼の霊を新しい家族に注ぎ心を造り変え
彼らが神と隣人を愛し
それによってトーラーを守ることができるようにしました
そしてこの新しい人間の創造は世界を救い新しくして
神の愛で満たすという目的の第一歩だったのです
これで 1 章から 8 章が
長い一つの思考の流れであることがわかりました
しかしここで疑問が浮かび上がります
もしこれが神の目的ならパウロの同胞であるイスラエル人たちで
イエスをメシアと認めない人はどうなるのでしょう
この神の計画は彼らへの約束を実現するのでしょうか
パウロはイエスをメシアと見なさないイスラエル人に胸を痛めつつ
9 章で旧約時代のイスラエルの過去について振り返ります
そして単にアブラハムの血筋であり
イスラエル人であるだけでは誠実な神の契約の民にはならないと述べます
パウロは神がその約束を実現するために常にアブラハムの子孫から
ある一部の人々を選んできたと言っています
そして今その約束を引き継いでいるのは
イエスに従う者だというのです
パウロはアブラハムの子孫もそれ以外の人々も
長年にわたって神に逆らってきたことに言及し
イスラエルと金の子牛の話やファラオの反逆の話をしています
そして神は神に対する人々の拒絶さえ
贖いの計画を実現するために用いられたと説明しました
そして 10 章で話題を現在のイスラエルに移しているのです
多くのイスラエル人がイエスを拒む理由は彼らが
神との契約関係はトーラーの戒めを守るか否かに
かかっていると考えているからです
そのため残念なことに彼らは神が信仰に基づく新しい家族を作るために
イエスを通してなさったことを理解できないのです
そしてパウロは 11 章でイスラエルの未来に焦点を当てます
神は彼らを見限ったのでしょうか
そんなことはありません
パウロは自分も含めイエスをメシアと信じるユダヤ人

は大勢いると言っています
しかしそうではないユダヤ人も大勢います
それでも神は彼らの拒絶さえも
ご自分の計画のために用いられてきたのです
そのことによって福音はより早くより遠く
異邦人の世界に広がっていきました
そしてアブラハムの家族は多様な民族を含みながら
さらに大きくなっていったのです
パウロは神の契約の家族を大きなオリーブの木に例えています
イエスを拒む者は折れた枝であり
異邦人は神の家族に接ぎ木された野生の枝です
しかしいつの日かイエスはご自身の民に受け入れられる日が来ると
パウロは言っていますが
それがどのようにしてなのかについては語っていません
パウロはただ神の性質と約束に信頼し
この方がご自分の契約の民を捨て去るわけがないと信じているのです
最後のセクションである 12 章から 16 章に移る前に
ここでおさらいをしてみましょう
イエスを信じる者はユダヤ人も異邦人も等しく
神の聖霊によって新しくされた人間として
アブラハムの子孫とされました
これが神がいにしえからの約束を実現する方法です
ですからユダヤ人も異邦人もひとつの教会として一致することこそ
正しい応答なのです
そして 12 章から 13 章でパウロはこの一致は
互いに対する愛と赦しへの決断から生まれると言っています
愛とは教会の全員がさまざまな才能や
賜物を用いてお互いに仕えること
また謙遜と赦しを通して現わされます
いろいろな民族がそれぞれの文化をもってイエスのもとに集まるとき
衝突は避けられません
これを乗り越えられるのは赦しと和解のための努力だけなのです
この努力をするなら神と隣人とを自分自身のように愛せよという
トーラーの最も大事な戒めを守ることになり
クリスチャンの最大の美点である愛を示すことになります
14 章と 15 章ではパウロは

ローマの教会の中で民族間の分裂を生んでいた
特定の問題に焦点を当てています
それはユダヤの食事規定と安息日について論争でした
パウロはこれらの問題によって
イエスの家族であるか否かは変わらないと言っています
このように文化的には重要だけれども
信仰生活において本質的ではない
部分で違いが生じた場合は
お互いの違いを尊重するすべを学ぶ必要があります
そしてこうすることによって
愛が神の家族を癒やし一致をもたらすのです
この手紙の最後でパウロはまず
ケンクレアの教会のリーダーであるフィベを褒めています
彼女がこの手紙をローマにあるいくつかの教会に届けたと思われ
そこで朗読もしたのかもしれません
次にパウロは長い間会っていない信徒たちに挨拶を述べ
手紙を閉じています
この手紙のそれぞれの部分がいかに調和し
全体として非常に深い内容が詰まった
傑作であることがおわかりになったでしょうか
これがローマ人への手紙です

【要約】
パウロの手紙は、すべての人間が罪の救いを必要としており、トーラーに従うだけではそれがもたらされないことを説明しています。義なる神はイエスの死とよみがえりを通じて世界を救い、信仰に基づく人々から成るアブラハムの家族をご自身の民としました。この手紙は、信仰による義認について、人がイエスを信じることで新しい関係に入ると説明しています。また、新しい人間性がイエスと共に生まれ変わり、信者は神と隣人を愛し、トーラーを守ることができるようになります。パウロはイスラエルに律法が与えられた目的を説明し、イエスによって解決されたことを強調します。最後に、パウロは信仰に基づく家族の一致、愛、赦し、文化的な違いへの対処の大切さを強調し、手紙を締めくくります。